

国際 7 9 / 経済 10 11
 解説 12
 商況 基・将棋 14 15
 スポーツ 18 19 21
 暮らし 22 23
 童話「ミーナの行進」 24
 小説「にぎやかな天地」 14



吉野家 24年ぶり赤字

トヨタ、ポイズン・ビル導入検討

英皇太子、結婚の日にさんげへ

「砂の器」野村芳太郎監督 死去

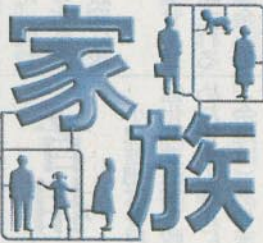
アカモスなどの繁殖地が大幅に減少(自然環境研究センター提供)

午後7時半。東京・日暮里の集合住宅「かんかん森」の食堂に住人が集まってきた。20代の若者もいれば年配者の姿もある。「おはあちゃん、こっち」。中年の女性がお年寄りの手を引いてゆっくり食卓に導いた。

28部屋ある居住部分は一戸一戸分かれているが、食堂やテラスなどは共有だ。食事の準備と共有部分の掃除は当番制になっている。

完成は一昨年6月。プロの住人が気を付けてくれるグラマーの木下孝二さんの(28)、妻の会社員彦坂早苗さん(28)は、「育児に良さを」と入居を決めた。幼い2人の子がいるが、住人の目が届く範囲で子供が遊んでいる間は一息つける。以前の住まいは一軒家。

「近所との関係は薄く、子育てするのに孤立感があった」と木下さんは話した。会社員守分淑子さん(53)は認知症(痴呆)の母親(80)と2人暮らし。母親は内廊下や食堂は歩くが、他に



第2部

成熟社会のきずな 5

「近居」選ぶ親子 寄り添い、助け合う。それは元々、家族の姿だった。親と子の間でも、核家族化で離れていた距離が近づきつつある。

都市再生機構が2003年度に新規募集した入居者のうち、近くに親などが住

呼ばれ、日本では、阪神大震災後に被災者用の復興住宅として登場。一般向けに東京、大阪、福岡などへと広がっていった。

「部屋ではブライパシーが守られるし、部屋の外には人とのおれ合いがある。「かんかん森」の住人の一人、木村ひろ子さん(60)は老後を過ごす場として、ここを選んだ理由を話す。

支え合う暮らし“復活”



近くに住み、支え合う3家族9人。飯島保子さん(左から3人目)が夜中に病気で倒れた時には、娘たちが駆けつけた(千葉・幕張で)

「働く母親の増加が近居の増加につながっている。家計経済研究所の永井暁子次席研究員の分析だ。

ありがたさ再認識 美波等さん(44)、之里さん(44)夫婦の一家は、同じ幕張で、妻の両親、夫の兄一家と近居する。3世帯は互いの家の鍵を持ち合う。

年一戸建てを売って近くのマンションに居を構え、03年には二女(36)一家もこの地に移った。

「働き母親の増加が近居の増加につながっている。家計経済研究所の永井暁子次席研究員の分析だ。

「近所との関係は薄く、子育てするのに孤立感があった」と木下さんは話した。会社員守分淑子さん(53)は認知症(痴呆)の母親(80)と2人暮らし。母親は内廊下や食堂は歩くが、他に

呼ばれ、日本では、阪神大震災後に被災者用の復興住宅として登場。一般向けに東京、大阪、福岡などへと広がっていった。

「部屋ではブライパシーが守られるし、部屋の外には

む「近居」のケースは全体の10%。01年度は4%だった。住宅専門誌を発行するリクルートでは「地価下落で住宅購入が容易になり、同居より気兼ねが少ない近居が選ばれている」と説明して飛び込んできた。「お願

い」。親に葉を渡し、娘を託すと、急いでパートに出かけた。

3家族9人が同じ区画で暮らす。まず1996年に由花さんの一家がマンションを購入。両親も2000

「働き母親の増加が近居の増加につながっている。家計経済研究所の永井暁子次席研究員の分析だ。

「子供に何かあった時に親が助けてくれるから」と、私が動けるんです」。派遣社員之里さんは話す。

大妻女子大の炭谷晃男教授(社会情報学)は指摘する。「成長が終わり、少子高齢化も進んで、国の社会保障や企業の福利厚生制度には家族の将来をゆだねられないと考える人が増えた。親子や近隣同士の支え合いのありがたさを、人々は再認識し始めている」(英文はあすのデイリー・ヨミウリに掲載します)